

伴侶動物における細菌感染症について

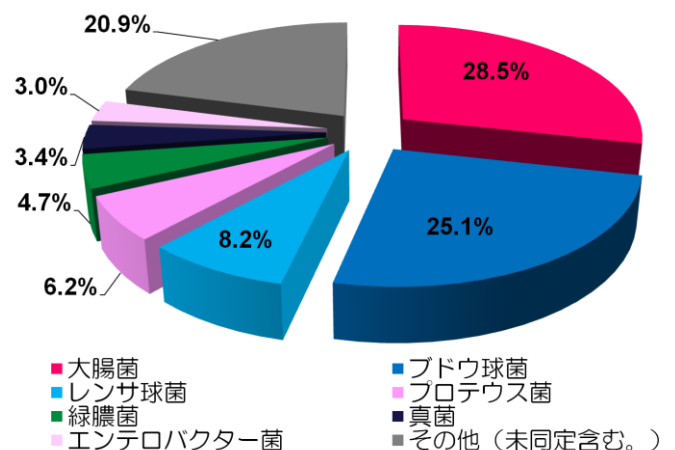
鳥取大学農学部獣医学科 獣医内科学教室 准教授 原田 和記

【はじめに】

小動物臨床において、感染症は日常的に遭遇する病気の一つといっても過言ではなく、その原因となる病原体は、細菌、寄生虫、真菌、ウイルスなど多岐に渡ります。中でも、細菌感染症においては、様々な部位や臓器に多種多様な病原菌が感染しうるため、その対応にご苦労されている獣医師の先生方も少なくないのではないのでしょうか。今回は、犬や猫において特に細菌感染症が発生しやすい尿路、生殖器、皮膚および外耳炎由来の検体からの細菌の検出状況について以前の調査結果に基づいて紹介したいと思います。

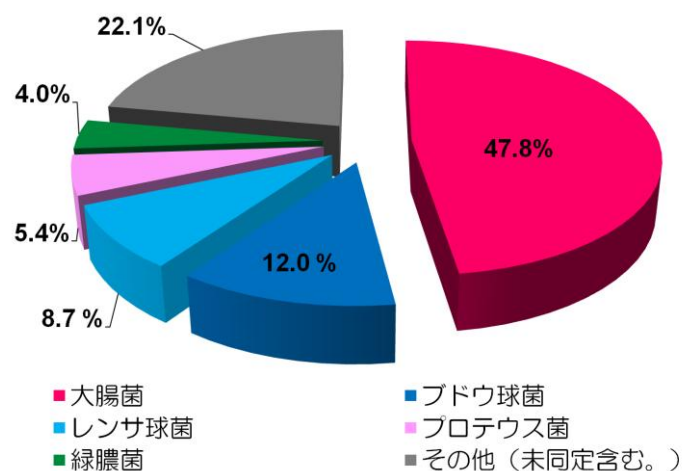
【尿路由来検体について】

尿路由来の検体のうち、半数近くは大腸菌またはブドウ球菌が分離されております。次いで、連鎖球菌、プロテウス菌、緑膿菌などが検出されている状況です。これらの検体が分離された個体は主として膀胱炎を発症しており、分離細菌はその起因菌と考えられます。



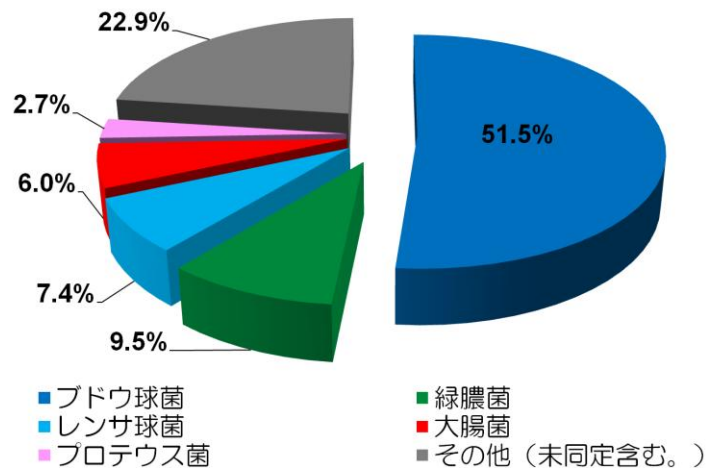
【生殖器由来検体について】

尿路と同様に、大腸菌が最も分離率が高いですが、尿路由来よりもその割合が多く、約半数近くが大腸菌で占められている状況です。続いて、ブドウ球菌や連鎖球菌などが分離されております。これらの検体の多くは子宮蓄膿症に由来するものです。



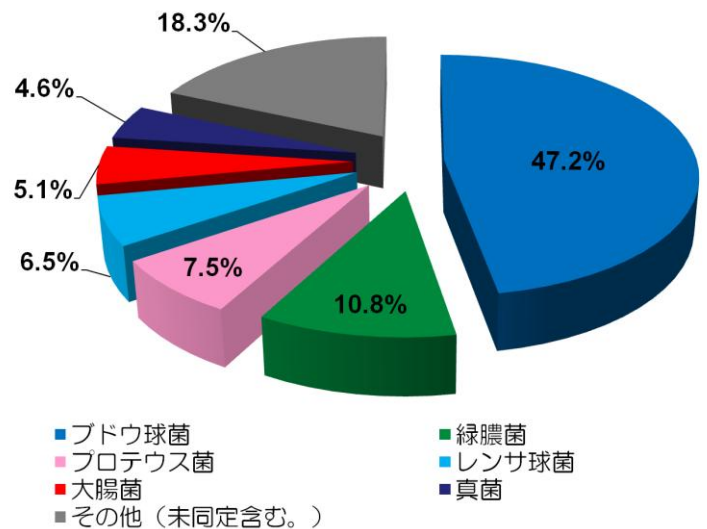
【皮膚由来検体について】

皮膚由来検体では、ブドウ球菌が半数近くを占め、次いで、緑膿菌、連鎖球菌が多い結果となっております。これらの検体の多くは犬膿皮症に由来していますが、ブドウ球菌が関与する典型的な症例以外に難治性の症例も含んでおり、そのため、緑膿菌などの他の菌種も比較的多く認められています。



【外耳炎由来検体について】

基本的には、皮膚由来検体と類似した傾向を示しており、やはりブドウ球菌の分離率が高い傾向にあります。特に耳由来病原菌の特徴として、混合感染が多いことであり、複数の菌種又は酵母が同時に検出されることも珍しくありません。



【さいごに】

概して、分離部位ごとに主要な菌種は異なっており、尿路及び生殖器からは大腸菌の分離頻度が高く、また、体表部位(耳、皮膚)に由来する検体についてはブドウ球菌の分離頻度が高いことが特徴としてあげられます。注意すべき点は、これら主要な原因菌以外にも多様な細菌が分離されているという点です。臨床現場において重要なことは、細菌感染症の原因菌が何であるか以上に、その原因菌に対して適切な抗菌剤を使用しているかという点ではないかと思えます。抗菌剤が効かなかった場合に、すぐに耐性菌を疑うのではなく、想定している菌種でない可能性はないかを振り返り、原因菌の検索を注意深く行うことも大切であると思われれます。